



ルーシー・ワースリー (著),

中島俊郎/玉井史絵 (訳)

『暮らしのイギリス史——王侯から庶民まで』

Lucy WORSLEY, trans.

Toshirou NAKAJIMA and Fumie TAMAI,

*If Walls Could Talk: An Intimate History of the Home*

(364 頁, NTT 出版, 2013 年 1 月,

本体価格 3,600 円)

ISBN: 9784757142923

(評) 市橋孝道

Takamichi ICHIHASHI

冒頭を飾る興味深い小話や高尚な議論の持ち合わせがないため、恐縮だが卑近な個人的体験談から始めねばならない。それは、『クリスマス・キャロル』を精読中、ジョン・リーチによる挿絵を見た時のことである。テキストから想像したスクルージは、冷徹で厳めしいイギリス老紳士だったのだが、その彼が最初の挿絵では寝巻姿にナイトキャップを被っているのである。寝巻には今なお自分でも着替えたりして馴染みがあるものの、ナイトキャップを被るとは、浅薄だが随分「子供っぽい」というか「かわいらしいなあ」という印象を抱いた。しかし、そんな稚拙で主観的な印象は他のディケンズと会話で口にするのも憚られ、自分だけの感想として胸の内にとめておいたのである。ところが、今回本書を読む機会を授かり、スクルージがナイトキャップを被っている理由が分かった。と同時に、自身の知識の足りなさを痛感するに至った次第である。本書によれば、「頭をおおわずに就寝することは、病が悪しき『瘴気』によって空気感染すると考えられていた時代にあって、危険きわまる行為であった」のだ。ナイトキャップはスクルージの好みによって被られていたわけではない。彼は迷信のような当時の常識を信じ、きわめて“普通”に寢床に就いていただけなのである。但し、彼がこうした考えを僅かながらも気にかけて慣例に従っている様子からは、彼の臆病さも垣間見られよう。可笑しいのは、ナイトキャップの甲斐なく彼のところに漂ってきたのは、「悪しき瘴気」どころか最悪の幽霊たちであったということだ。このことは、専門家であるならば常識レベルの知識として持ち合わせている

べき背景知識であろうが、勉強不足の私には微笑ましい小さな発見であった。

しかし、この体験は本書の意義や価値を考える上で大きなきっかけとなった。英文学史上キャンノンとされる作品の粗筋や主題が広く世界に知られてきている現代、それらを再(精)読したり、綿密に研究したりすることの意義・重要性を再確認させられたからだ。優れた文学作品が包含する全ての要素は一度きりの通読では決して鑑賞しつくせない。ナイトキャップ一つ、壁紙一枚からも深遠な意義や時代的・文化的背景を読み取ることができ、時にそれらは単なる瑣末な小道具として一蹴してしまうわけにはいかないことがある。ナイトキャップを被ったスクールジに違和感を感じた際、それを根気よく徹底的に追究していれば、現代に生きる日本人からは想像もつかぬような当時のイギリスの考えをもっと早い段階で知りえていたであろう。ただこれは一見したところ、トリビアルな背景知識を得たに過ぎず、作品解釈に深く関わるものではないと揶揄されるかもしれない。ならば本書に紹介される壁紙についての話はどうだろう。トマス・ハーディの『狂おしき群れを離れて』(1874)に登場するトロイ軍曹の欺瞞的性質は、古民家の薄暗い部屋壁の上に、自分なら「壁紙を張るだろう」という彼の台詞に示唆されている、というのだ。これは「十九世紀の小説では、壁紙張りの部屋が、うわべばかりを取り繕う軽薄で信用できない登場人物の内面描写に転化されることがあった」例として挙げられている。

冒頭に上記のような2例を掲げると、本書は何やらカルチュラル・スタディーズ系の文学研究書であるような印象を与えてしまう。このため、ここで断り書きをしておかねばならない。上記2例はあくまで文学研究に従事する者の好奇心をくすぐった本書の断片にすぎず、この書物それ自体は歴史家ルーシー・ワースリーの大変な人気を博した親しみやすい歴史研究書の邦訳である、と。彼女にとって本書は、『ある騎士の物語』(2007)と『廷臣たち——ジョージ王朝裏面史』(2010)に次ぐ第3作目の労作であり、本国のみならず世界の各主要紙でも絶賛されている。

2011年4月に出版後、イギリスではBBC4で原題と同名のTVシリーズが4回にわたって放映され、著者自身がナビゲーターを務めている(有難いことに、これらは現在インターネットでも視聴可能である)。番組では様々な日用雑貨や住居にまつわる歴史が紹介されるのみならず、著者自身が過去の生活を体体験する様子まで目にすることができ、ロンドン塔やハンプトンコート宮殿などで学芸員として働く彼女ならではのナビゲートぶりも実に見事である。こうした秘かな知的メディア・センセーションを巻き起こした本書を、明解かつ味のある日本語訳で楽しめるのはとても贅沢なことと言わねばならない。

本書の原題は『壁が口をきけたなら——家をめぐる詳細な歴史』となっており、

基本的には特定の時代や階級に焦点を絞ることなく、広くイギリス家庭全般に見られる細かいモノの歴史や生活実態を、著者の体を張った体験型調査と膨大な資料、そして興味深い話題の連係で鮮やかに紹介している。『暮らしのイギリス史——王侯から庶民まで』という邦題が、こうした原書の内容と特徴を最もよく掴んだ簡明なタイトルであることは特筆に値しよう。イギリスのミクロな歴史に興味をもつ人、日用品や(英語の)慣用句の謂れ等まつわる雑学を求めている人、はたまた将来的な人間生活の行く末を過去の歴史に学ぼうという人々には好適の良書と言えよう。加えて、先に発表された2作からも窺えるように、彼女が元々綿密な調査を重ねてきた時代は16から18世紀でもあるため、これまで畏敬の念で追究が躊躇われた宮廷の舞台裏や生々しい現実の人間生活に強い好奇心をもたれる方々にも勿論お薦めである(実際、トピックによっては若干これらの年代に関する話の割合が多いように見受けられる)。さらに、英文学研究に従事する者からすれば、特に18世紀後期から19世紀全般にわたって隆盛を極めた家庭小説(Domestic Fiction)を研究・再読する際には、本書で得られる知識がより豊かな読みを提供すること間違いなしである。基本的に本書は歴史研究書ではあるものの、文学テキストも歴史資料の一部として引用されており、逆の立場から、引き合いに出される作品を新歴史主義(または文化唯物論)的姿勢で読み直す契機ともなるであろう。

本書の構成は4部から成り、第1部は「寝室の歴史」、第2部は「浴室の歴史」、第3部は「居間の歴史」、第4部は「台所の歴史」となっている。邦訳では各部の表題直後に「なぜ見知らぬ者同士が同じベッドで寝たのか?」(第1部)「なぜ水洗便所は開発から普及まで二百五十年もかかったのか?」(第2部)「なぜランプ磨きは召使いたちに嫌われたのか?」(第3部)「なぜ富裕者は果物に食指を動かさないのか?」(第4部)という副題のような問題提起が付されているが、原著の同箇所にはこれらは見当たらない。第3部の表題に付されたもの以外は著者が序文の書き出しに掲げている疑問文であり、本書の最も好奇心を掻きたてるポイントを凝縮して読者に投げかけたものと捉えられる。邦訳ではこの効果を意識してか、第3部の表題には第27章の話題「暖房と照明」をもとにしたその部のエッセンスを暗示する疑問文が明敏にあてがわれている。各部はさらに約10章ずつ程度のトピックに分かれているが、それらは冒頭に掲げられた問題を論理的段階を追って解明していくものではなく、テーマとなる場所にまつわる独立した話題・小論となっており、最初の大きな疑問には直接または間接的な形で答える仕組みとなっている。

全部で45ある各章のタイトルは、一見したところ極めて普通の名詞が並んでいるだけのように見えるが、よく見ると実際は本書のオリジナリティーを雄弁に

物語っている。というのも、ワースリーは、これまでプライバシーやデリカシーで包まれてきた日常生活のベールを容赦なく剥ぎ取り、淡々とした調子で時にはグロテスクな人間の営みの深奥部にまで迫っているからである。ここに非人間的な「壁」(walls)が史実の証人として原題の主語に挙げられている所以があるのであろう。よって、章題には「セックス」「性癖」「性病」「便所」「月経」などの言葉も「化粧」「儀礼」「恋愛」と並列して掲げられ、各々の話題は大胆かつ赤裸々に繰り広げられていく。例えば、第1部「寝室の歴史」の「セックス」の章では、冒頭からジェームズ・ボズウェルの『ロンドン日記』より彼の性生活に関する記述が取り上げられ、彼が女優にして売春婦であったルイザと一夜にして「五度までも恍惚に忘我となってしまった」一節が憚りなく引かれている。また、第2部「浴室の歴史」の「便所」の章では、1761年に開かれたジョージ三世の戴冠式において、便意をもよおしたニューキャッスル公爵が不敬にもエリザベス女王専用の可動式室内便器を使用して逮捕されたエピソードがリアリティあるテクストの引用で紹介される。公爵は「『聖油で清め、ベルベットを張りめぐらせた便器でいきんでいる現場』を目撃されて」しまったらしい。ここからはまた、「壁」と自称するワースリーの観察眼が階級という境界を不問にし、まさに「王侯から庶民まで」に注がれている点も確認できよう。

こうしたベールを突き破るワースリーの探究心は、さらに読者を飽きさせない気配りや筆力と結び付き、歴史的時代区分をも縦横無尽に行き来するため、紹介される生活諸事の発展のみを年代順に辿りたい読者からは、やや焦点がぶれて追いつらい話題展開だという苦言が呈されるかもしれない。実際、第10章の冒頭は性病を患ったボズウェルの悲痛な叫び(1710年9月9日の日記の一節)から始まるものの、第2パラグラフでは、第一次大戦中に低下した若者たちのモラルを嘆く評論家の声が引かれ、20世紀初頭には淋病撲滅運動が優生学の影を帯びて、結婚希望者たちは医師の検査と認可を得るよう呼びかけられていた事実が紹介される。そして第3パラグラフになってようやく15世紀以降の性病の歴史の変遷が語られ始められるのである。しかし、これは顕著な一例に過ぎず、時間軸が前後する他の多くの個所では、振り幅も小さく、それらが話題内容の変化に応じて前後していることに留意して読めば大した困難とはならない。例えば、「暖房と照明」の変遷を紹介した第27章では、16世紀頃からの暖炉の歴史が辿られていき、17世紀後半に暖炉に焼べる家庭用燃料が薪から石炭へと変化し、18世紀には水を利用した革命的なセントラルヒーティングが病院や牢獄等の公共施設から普及していった事実が紹介される。この際、この新たな暖房システムが個人の邸宅へ広まるのに時間がかかった理由として、暖炉の火起こしと清掃にメイドを雇える裕福な家庭では、より便利な新設備を特に導入する必要がなかった点が挙げ

られている。そしてここから話題は、1870年代に書かれたメイドの手紙の一節や1920年代の資料が参照され、暖炉を維持管理する召使いたちの苦労話とイギリス人たちがいかに暖炉に愛着をもっているかという話に移り、次段落では1830年や1782年の書物が引かれて、召使いたちに提案された清掃のコツと裏技が紹介されている。こうした一連の流れからは、著者が体系的に整理された単なる説明文の連続よりも、内容の興味深さと自然な話題の推移に重きを置いている姿勢が窺えるのである。

富山太佳夫氏の寸鉄的表現を借りるならば、本書は確かに「ネタ満載の学術書」(毎日新聞、2013年6月16日、書評)である。しかし、本書には歴史家ワースリーならではの「温故知新」の精神が首尾一貫して横たわり、彼女は常に「過去の生活と現在をつなぐ」(日本経済新聞、2013年3月3日、新井潤美氏評)努力を怠らない。幾つかの章は、現代的な観点からの機知に満ちた鋭いコメントで締めくくられており、ワースリーの社会・文化的批評眼も垣間見られる。こうした所信は最終章「結び 過去の教訓」(英題“Conclusion: What We Can Learn from the Past”)において実質的に表明されており、過去の歴史に学べる物事から現代社会の行く末が洞察されている。例えば、現在の新築家屋では中世へと回帰するかのよう多機能部屋や煙突が復活し、省エネの時代が到来する中その利便性や保温・換気性能が見直されている事例を紹介していたり、「ヴィクトリア朝時代の主婦はあらゆるものを再利用し、無駄を最小限にとどめていた」ため「旧式家事も見なおさなくてはならない」と訴えていたりする。

図版を含む膨大な資料や情報を、崇高なる歴史家の信念をもって、時にはユーモラスに、時には才気あふれる文章で興味深い話題に編みあげていくワースリーの努力と才能にはただただ敬服するばかりである。こうした優れた研究書を日本語で気軽に楽しめるように作成して下さった訳者や出版社の方々に心から御礼申し上げたい。多数ある原書の図版は全て再録されておらず、誤植もほんの少し見られたが本書の価値を下げるようなものではないだろう。

